

<書 評>

大橋鎮子 『[ポケット版] 「暮らしの手帖」とわたし』

(暮らしの手帖社, 2016年, 269頁)

軽 部 恵 子

本書は、2016年度前期のNHK朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」の主人公のモデルになった大橋鎮子の自叙伝である。著者は、暮らしの手帖社を創設し、社長に就任して、名物編集長の花森安治とともに「戦後日本の『くらし』を創ったふたり」である。社長でありながら、「しずこさん」と社員たちから親しみを込めて呼ばれた。時には服のモデルとなり、料理の手順の写真撮影に手のモデルを務めるなど、何でもこなした人であった。

暮らしの手帖社は、雑誌『暮らしの手帖』の出版元である。広告を掲載せず、商品テストを徹底的に行う。評者の周辺にいる40-50歳代には、親が『暮らしの手帖』をよく読んでいたという人が多い。評者も子どもの頃、洗濯機、ストーブなど、商品テストを熟読した上で親が製品を購入していたのをよく覚えている。

暮らしの手帖社が商品テストを始めたのは、1954(昭和29)年の第26号からであった。その前に、10号ほど生活に役立つ商品の紹介を行い、それが商品テストにつながったという。商品テストをする団体は初めてではなかったが、取り上げる商品の選び方、検査する項目と検査方法など、すべて白紙から取り組んだ(129頁)。対象商品はソックスに始まり、マッチ、鉛筆、

アイロン、醤油、電球と身近な商品が続き、やがてトースター、洗濯機、石油ストーブなど、「快適な暮らしのために使ってもらいたい」機器、話題の新製品と、広がっていった(129-130頁)。

商品テストは並大抵の苦勞ではなく、従事する社員たちはさぞかし大変であったろう。トースターの商品テストでは、焼かれた食パン数万枚が積み上げられ、あたかも美術館のオブジェに見えた。大橋鎮子の自伝には、大変さが大変とは書かれていないが、小樽雅章、唐澤平吉や津野海太郎の著作を読むと、今なら「ブラック企業」として批判されたと確信する。何しろ、「お先に失礼します」は許されなかったのだから(小樽, 272頁)。商品テストの公正さを保つため、テスターは先輩・友人関係の会合に行くのを避け、出版健康組合に加入したのは花森安治が亡くなった後だったという(津野, 312-313頁)。庶民の暮らしを守る最前線は、文字通り「戦場」であった。

近年、大企業による商品テストの不正が国内外でよく見られる。食品、自動車など分野を問わない。あるいは委託先の不正や不適切な行為を見破れず、動画投稿サイトに画像が出て、売り上げが激減したままの外食産業もある。朝ドラを見て溜飲を下げると同時に、嘆息をもらす視聴者も多かったのではないか。

ところで、大橋鎮子は名エッセイストとしても知られる。「エプロンメモ」は、1954年9月以来、毎号連載されてきた。開始からしばらく「堀川あき子」の名で書かれていたそうである。ごく短いエッセイだが、暮らしの知恵が書かれている。食材を無駄なく使う方法、おいしい紅茶の入れ方、残り物のおいしい食べ方(電子レンジがない時代である)、泥はねの落とし方、親しい人への贈り物など、取り上げたトピックは多岐にわたるが、共通するのは、著者の「暮らしの知恵を分かち合いたい」という素直な気持ちである。今ならインターネットで検索すれば、レシピのサイトから個人のブログまで、他人の知恵を探すのは簡単だが。筆者は、読後感がさわやかな『エプロ

ンメモ よりぬき集』を「清涼剤」に使っている。

「すてきなあなたに」は1969年に連載が開始された。著者が49歳の時に始まり、40余年続いたものである。「エプロンメモ」とは異なり、食べ物より外国に行った話が多い。たとえば、著者はロンドンでイングリッド・バーグマン主演のコメディを見ている。当時バーグマンは56歳だったそうだが、ウェストエンドでさぞかし評判だったのか。評者にとってのバーグマンは、映画「カサブランカ」(1942年)、「誰が為に鐘は鳴る」(1943年)、「ガス燈」(1944年)、「追想」(1956年)に見られる美女のイメージが強かったので、コメディは驚きであった。

評者の手元にある本はどちらも今年出版された『よりぬき集』なので、どのエッセイがいつ書かれたものかわからない。まことに残念である。初出の掲載日がわかれば、庶民史研究の手がかりとして大いに役立つであろう。

最後に、ここ数年、NHKの朝ドラは実在の人物をモデルに、彼女たちが活躍した時代を、現代的視点を交えながら描くことが多い。年配の視聴者には自身の若い頃、あるいは親や祖父母の時代を思い出しながら見られる。と同時に、若い視聴者にとっては非常に新鮮に映る。そこで、ドラマの時代背景を説明する各種の書籍が出版されるのだが、これらの書籍は安易に「便乗」と呼べない、すぐれた内容のものが多い。また、互いに視点を変えて、内容が重ならないようにしてある。スマホの普及による新聞読者の激減、電子書籍など、出版業界には厳しい環境が続くが、これだけ質の高い関連書籍がドラマをきっかけに出版され、また、それが売り上げにつながる場所を見ると、日本の出版業界と読者はすばらしいではないか。

<参考文献>

唐澤平吉『花森安治の編集室：「暮しの手帖」ですごした日々』文藝春秋 2016年
暮しの手帖編集部編『エプロンメモ よりぬき集』暮しの手帖社 2012年
同編『すてきなあなたに よりぬき集』暮しの手帖社 2012年

- 小樽雅章『花森さん、しずこさん、そして暮しの手帖編集部』暮しの手帖社 2016年
- 近藤理『大橋鎮子：花森安治と創った昭和の暮らし』三オムックvol.864 三オブックス 2016年
- 『「暮しの手帖」初代編集長 花森安治』暮しの手帖別冊 暮しの手帖社 2016年
- 『しずこさん 「暮しの手帖」を創った大橋鎮子』暮しの手帖別冊 暮しの手帖社 2016年
- 津野海太郎『花森安治伝：日本の暮しを変えた男』新潮社 2016年
- 『歴史読本』編集部編『大橋鎮子と花森安治』KADOKAWA 2016年